

空海・高野山検定 解答解説（2級）

No.	正解	『空海・高野山の教科書』参照ページまたは解説
1	③	p.010
2	②	p.010
3	①	p.012,013
4	④	p.012,013
5	④	p.013
6	②	p.013
7	②	p.015,016
8	①	p.021
9	④	p.022
10	③	p.024
11	②	p.025
12	①	p.026
13	②	p.026 ⇒戒壇院は正式な僧侶になるために具足戒という戒を受けるための施設です。東大寺のほかにも、下野薬師寺、筑紫観世音寺にも戒壇院があり、「三戒壇」と称せられました。空海が具足戒の受けたのはこの内の東大寺戒壇院であると言われています。
14	②	p.028
15	④	p.030
16	②	p.030
17	④	p.029 ⇒真言宗では、密教を伝えた八人の祖師の系譜として、龍猛菩薩からはじまり、善無畏三蔵・一行禅師を組み入れる「伝持の八祖」と、大日如来、金剛薩埵から空海までの8人の祖師の系譜を伝える「付法の八祖」の二通りがあります。「付法の八祖」の場合には、善無畏三蔵・一行禅師は含まれません。
18	③	⇒三綱とは、寺院に置かれた役職（上座・寺主・維那）のことです。上座は僧侶たちの監督者、寺主は事務・経営の責任者、維那は規律や学問の監督者にあたります。空海は弘仁3年（812）12月に高雄山寺の三綱として、杲隣（上座）、実恵（寺主）、智泉（維那）を選んでいます（『性霊集』巻第九、『高野雑筆集』巻上）
19	②	⇒空海の十大弟子の一人に数えられる泰範は、もともと最澄の弟子でしたが、空海のところで密教を学び、そのまま空海の下にとどまった人物です。泰範の去就については、空海が泰範のかわりに最澄に送った書簡が残っています（『性霊集』巻第十）。
20	①	p.035
21	④	p.037
22	④	p.040
23	③	p.097
24	②	p.042
25	④	p.042
26	①	p.043

空海・高野山検定 解答解説（2級）

27	①	⇒智泉（789?-825?）は、空海に「俗家には我を舅といい、道に入ってはすなわち長子なり」（『性霊集』巻第八）と言われるように、空海の甥であると同時に、一番弟子とも言える存在でした。高野山寺でも僧侶教育の監督者（維那）に選ばれるなど、空海の片腕とも言える存在でしたが、空海より先に亡くなられてしまいます。空海はその早すぎる死を「悲しいかな、悲しいかな、重ねて悲しいかな」と悼んでいます。
28	③	⇒藤原三守（785-840）は、嵯峨天皇および淳和天皇のもとで活躍した平安初期の公卿で、嵯峨天皇にとっては、皇太子時代からの側近の一人でした。温和で慎み深い一方、決断力に求めた人物であったと評されています。空海の「綜芸種智院の式ならびに序」には、「辞する納言藤大卿、左九条に宅あり」（『性霊集』巻第十）とあり、彼の私邸が綜芸種智院の校地であったことがわかります。
29	④	p.043
30	②	p.044
31	③	p.045
32	③	p.046
33	④	⇒空海の著作である、『般若心経秘鍵』（1巻）、『即身成仏義』（1巻）、『声字実相義』（1巻）、『吽字義』（1巻）、『弁頭密二教論』（2巻）、『秘蔵宝鑰』（3巻）の六部九巻に、龍猛菩薩造・不空三蔵訳の『菩提心論』（1巻）を加えて「七部十巻」とし、これらをまとめたものを『十巻章』と呼びます。上記のテキストが『十巻章』の形がまとめられたのは、そんなに古い時代のことではないようですが、真言密教の教えや思想を学習する上では、この『十巻章』は必携の書と言えます。
34	④	p.050
35	②	⇒「加持」は、本来的には仏や菩薩が不思議な力を人々やものなどに加えることを意味し、「加被」とも訳されていました。空海は『即身成仏義』の中で、この「加持」という言葉を「如来の大悲と衆生の信心とを表す」と解釈し、仏の大いなる哀れみを、人々が信心によって受けとめることとして位置づけ、それが真言密教の修行の根本であることを示しています。
36	①	⇒空海の『声字実相義』では、「存在とは言葉であり文字であり、同時にそれらは真理の姿である」という言語哲学とも言うべき思想が論じられています。「五大に響きあり」ではじまるこの偈頌は、その『声字実相義』で論じられる思想の神髄を表しています。
37	①	p.051
38	①	⇒『般若心経』や『般若心経秘鍵』のタイトルにある「般若」は、サンスクリット語の「プラジュニャー」の発音を漢字に置きかえた音写語です。この「プラジュニャー」を訳す時は「智恵」と訳し、特に仏の智恵を意味します。
39	②	⇒空海は『般若心経秘鍵』の中で、それまでは「空」の教えを説く大乘仏教の経典と理解されてきた『般若心経』を、「大般若菩薩の真心真言三摩地門」と位置づけ、大般若菩薩の瞑想の境地が説かれた密教の経典として解釈しています。
40	③	p.052
41	②	p.060
42	③	⇒『秘密曼荼羅十住心論』は、心の発展過程を十段階から論じた、空海晩年期の主著です。その『十住心論』巻第十では、密教の悟りの境地である「秘密莊嚴住心」について、それが「自心（自分自身の心）の本源を覚り、自身（自分自身の身体）の数量を悟ることである」と述べられています。このような境地こそが、秘密の曼荼羅そのものにほかならない、という空海の思想が現れています。

空海・高野山検定 解答解説（2級）

43	③	p.054
44	①	p.055
45	③	p.063
46	④	p.063
47	②	p.069
48	①	p.074
49	③	p.076,077
50	③	p.034,078
51	③	p.081
52	②	p.081
53	①	p.083
54	④	p.086,087
55	②	p.088,089
56	①	p.092,093
57	④	p.094
58	④	p.096
59	③	p.097
60	②	p.102 ⇒密教の法具には、その一つ一つに意味が込められています。「輪宝」には、「仏の教え」という意味が込められており、これを回転させること（転法輪）は、仏の教えが説かれることを意味します。輪宝を回すこと（仏の教えが説かれること）によって、すべての無明や煩惱が断たれるとされます。
61	①	p.107
62	②	p.110
63	④	p.112
64	①	p.114,115
65	③	p.118,119
66	④	p.120
67	②	p.125
68	②	⇒御廟之橋をわたったところにある「みろく石」には、片手で持ち上げると願いがかなう、という言い伝えがあります。
69	④	⇒「景教」は、ネストリウス派というキリスト教の一派を漢訳した言葉です。5世紀の公会議で異端とされたネストリウス派はローマを離れ、シルクロードを渡って中国に伝わりました。空海にサンスクリット語を教えた般若三蔵は、景浄というペルシャ人の景教僧と経典翻訳にかかわったことがあります。その景浄が起文したのが、「大秦国景教流行碑」（大秦景教流行中国碑）であるとされます。なお、奥之院にある「大秦国景教流行碑」（大秦景教流行中国碑）は、ゴルドン夫人（1851-1925）という方が建てた複製品です。
70	①	p.141
71	②	p.106,127
72	①	p.127

空海・高野山検定 解答解説（2級）

73	③	p.128,129
74	④	p.128
75	①	p.130,131
76	②	p.134~147
77	④	p.142
78	③	p.144
79	②	p.144
80	①	p.147